みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

中央アンデスの農民と牧民の結婚：パンパマルカ教区（アブリマク県）婚姻登録の分析

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2010-02-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 藤井, 龍彦, 友枝, 啓泰
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004409

中央アンデスの農民と牧民の結婚

——パンパマルカ教区（アプリマク県）婚姻登録の分析——

藤　井　龍　彦*　友　枝　啓　泰**

Marriage Relations between Agriculturalists and Pastoralists in the Central Andes

—The Case of Pampamarca Parish, Apurimac, South Central Peru—

Tatsuhiko FUJII and Hiroyasu TOMOEDA

The importance of economic linkages or complementarities between agriculturalists and pastoralists in the highlands of the Central Andes have been pointed out by various scholars [e.g., FLORES 1968; MAYER 1971; CUSTRED 1974; CONCHA CONTRERAS 1975; CASAVERDE 1977; INAMURA 1982]. Also, some social relations, such as *compadrazgo, padrinazgo*, "acquaintanceship", and "mutual moral obligations" are established through these economic relations. Despite all these relations, the marriage relations between them are "rare". But the problem is the standard of "rarity". There are qualitative or impressionistic studies of "rarity" but no quantitative studies. The main object of this article is whether they intermarry and, if so, at what rate. For this study we selected the relatively confined area of Pampamarca Parish, Apurimac, South Central Peru.

Pampamarca Parish is on the upper Chalhuanca River, which is characterised by three ecological zones; *puna* (4,500–4,000 m), *suni* (4,000–3,500 m), and upper *quechua* (3,500–3,000 m) (Map 1). The high and extensive *puna* zone is the domain of pastoralists who are dispersed in four communities (Totora, Pisquicocha, Mestizas, and Iscahuaca), while the steep and narrow valleys are home to four agriculturalists communities (Pampamarca, Cotaruse, Colca, and Caraybamba). These agriculturalists cultivate mostly Andean tubers in the *suni* zone and grow maize and other cereals on terraces in the

* 国立民族学博物館第4研究部
** 国立民族学博物館第4研究部

valleys. The pastoral communities are exclusively dedicated to raising Andean domesticated camelids, alpacas and llamas, although they also cultivate tubers on a small scale. The agriculturalists also raise some Old World domesticated animals, cattle and sheep, in the *suni* and lower parts of the *puna*.

The study was based on some 70 years (1903–1972) marriage records. The total number recorded are 1,017 (Table 2-h), and they show high rates of village endogamy among the communities of the *puna* as well as those of the upper *quechua*. The preference is 1) the same village, 2) communities of the same zone, 3) outside the parish. It is clear that marriage between *puna* and valley residents are the least frequent.

In some marriage records, the husband's occupation is mentioned. Of the 316 cases where the occupation is known, 83 are pastoralists, 194 agriculturalists, and 39 of other occupations (merchant, employee, etc.). Table 5-b shows the origin of the 83 pastoralists, and reveals that there are also some pastoralists in the upper *quechua* communities.

In Tables 3-a to 3-g, show the number of marriages according to place of origin of the partners grouped by three zones; *puna*, valley, and outside the parish. In Table 4 indicates during a period of 70 years only 12 men of the valley married pastoralist women, and only 10 pastoralists married women from the valley, giving a total of 22 interzonal marriages, a small number indeed. In sum, although because of more dates are lacking and therefore it cannot be said with precision, it is evident that marriages between *puna* and valley residents have occurred only rarely.

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. パンパマルカ教区
Ⅲ. 農民と牧民の生活
Ⅳ. 農民と牧民間の結婚

Ⅰ. はじめに

中央アンデスのエスノヒストリー研究のなかでJ. Murraが提出した「垂直統御」の概念 [Murra 1972] は，この地域の住民の環境利用に対する研究者の関心を集めさせることになり，ここ10年余りのあいだに，この分野の調査，研究が進展した。こうした研究の一環として，海抜4,000 m以上の農耕限界を越えた高地にラクダ科動物

を飼育する牧民と谷や盆地に農耕を営む農民の相互関係が，経済的補完性に焦点を当てて，次第に明らかにされてきた [Flores 1968; Mayer 1971; Custred 1974; Concha Contreras 1975; Casaverde 1977; Inamura 1982, etc.]。

本稿の目的は，谷の農産物と高地プナの畜産物の交換を基本とする農民・牧民間の恒常的な経済関係と社会（婚姻・親族）関係のあいだに，何らかの意味のある相関が見出されるか否かを検討することである。農民と牧民の経済交換を扱ったこれまでのいくつかの調査，研究でしばしば指摘されてきたのは，この経済補完を確保するための「親しい知り合い関係」[Casaverde 1977: 177]，制度化されたカトリック擬制親族（コンパドラスゴ，パドリナスゴ）関係，あるいは「相互の道徳的義務」[Mayer 1971: 192] などが，農民と牧民のあいだに確立していることである。またその一方で，両者間に結婚の関係は稀であることも，いくつかの調査報告では言及されている [Flores 1968: 136; Casaverde 1977: 178]。しかしながら，この「稀である」という指摘は，量的にはっきり捉えられたものではなく，調査地で得た印象もしくは聞き取りに基づいている。

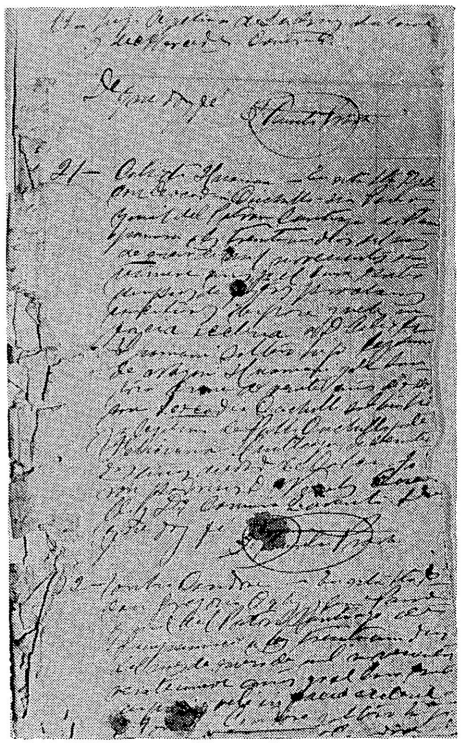


写真1　婚姻登録簿

そこでわれわれは，上述のような農・牧民の経済補完関係が成立している一定地域を対象にし，チャルワンカ (Chalhuanca) の司祭館に保存されている教会婚姻登録簿（写真1）を資料に用いて，農民と牧民間の結婚の可能性を量的に検討してみることにした。対象とする地域は，ペルー領アプリマク県 (Departamento de Apurimac) アイマラエス郡 (Provincia de Aymaraes) にあるパンパマルカ教区 (Parroquia de Pampamarca) であり，その教区での1903年から1972年までの70年間にわたる婚姻登録を扱っている。

この資料は，教区の司祭によって記録された婚姻の記録であるから，この地域の実際の結婚を把握しようとする場合には，おのずとその内容には限界

があり，以下の2点は考慮しておかねばならない。

1. カトリックの教理に基づいて教会で行われた結婚についてのみの登録であるから，実際に結婚し，夫婦であっても，教会婚でない限り記録にはあらわれてこない。
2. 対象地区内に居住する者の教会婚であっても，教区外の教会で式をあげ登記した場合にも，教区の記録としては残らない。

したがって，ここで扱う70年間の婚姻数1,017が，対象地域に現実に生じた結婚総数をどれだけ代表し得るかは，すぐには判断しがたい。例えば，図1は婚姻登記数を月別にまとめたものであるが，乾期（5～10月）に結婚が多く行われ，雨期（12～3月）には少ないという結果は，婚姻と年間活動サイクルの関係を反映していると思われる。しかし年別件数は図2のごとくであり，ある年に結婚が0もしくは極端に少ないというのは，もっぱら登記をする教会，もしくは司祭の都合によっているのであろう。

しかし70年間にわたる1,017の婚姻というのは，ある傾向を量的にみるに当っては，充分の数だと思われる。上記の限界を考慮した上でいえば，教区の婚姻登録は表1に

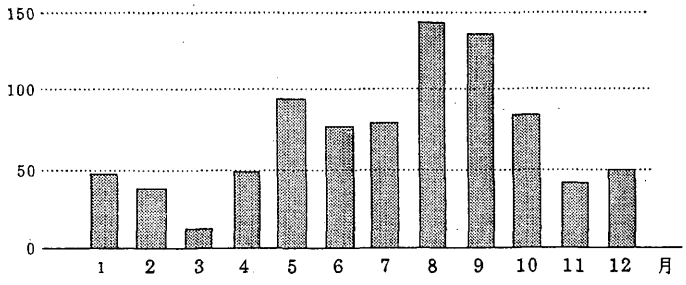


図1　パンパマルカ教区月別婚姻数

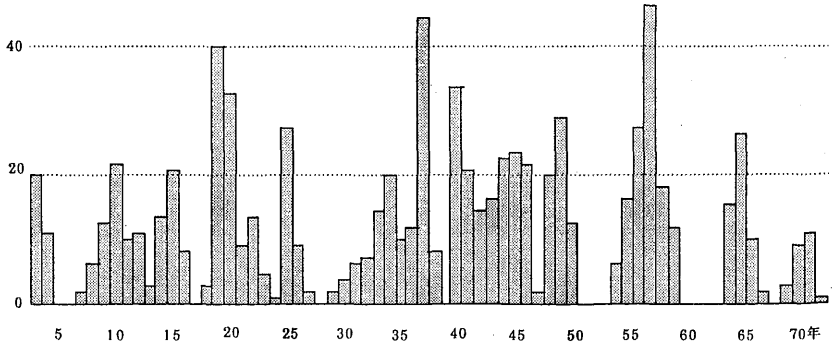


図2　パンパマルカ教区年別婚姻数（1903-1972年）

表1　教会婚姻登録の内容

1 結婚	a．結婚が行われた教会名 b．日付（年・月・日） c．結婚をとり行った司祭の署名
2 結婚当事者	a．姓名（名前・父姓・母姓） b．年　令 c．出生地（または洗礼地） d．現住地 e．初婚／再婚の別（後者の場合亡婦（夫）の氏名） f．インディオ／メスティソの別 g．職業（農業，牧畜，その他） h．嫡出／庶出の別 i．父母の姓名
3 その他	a．代父母姓名 b．証人姓名

示すような情報を含んでいる。

これらの内容をすべてみたしているとすれば，かなり豊富な情報を有していることになるのだが，実際には個々の登記の内容は粗密があり，極端な場合には，1, 2-a だけしか記録されていないこともある。また，職業の区別はわれわれの検討にとって，きわめて重要な項目であるが，残念ながら，ごく一部に記入されているだけである。ここでは，これらの情報をすべて検討するのではなく，ただ1つ，牧民と農民のあいだに結婚はあるか否かだけを，過去70年間にわたって調べるのであるから，利用した内容は 1-b, 2-c, d, g の4項目のみである。

教会の婚姻登録は村落社会の結婚の現実をそのまま反映していない可能性はあるにしても，多くの情報を含んでいることは重要である。また場合によっては，過去400年にわたって記録が残されていることもあるだけに，歴史人口学的な視点からは，きわめて貴重な資料になりうる（婚姻のみでなく，教会には洗礼，死亡についての記録も残されている）。しかしながら，これまでのアンデス農民社会の研究では，これらの資料はまだほとんど利用されず，わずかに友枝 [1968] が若干の資料を利用しているだけである。手書きの文書を判読するという根気のいる作業は依然残るものの，数量的処理が迅速に行えるようになった現在では，これらの資料を活用した研究が期待できるであろう。

先述したように，本稿の目的は，対象地域であるパンパマルカ教区に居住する牧民と農民のあいだに，どの程度に結婚があるかを検討することにつきているが，そのためには，まず経済的補完関係がどのようになっているかを捉えておく必要がある。II

章とⅢ章で教区の自然環境を概観し，そこでの農民と牧民の生活及び両者の経済関係を，われわれの観察と聞き取りに基づいて記述する。Ⅳ章では資料の集計・分析を通じて，両者間の結婚が量的にみてきわめて少ない可能性を指摘する。つまり，この地域の農民と牧民間の経済的補完関係は，他地域の場合と同様に双方にとって非常に重要であるが，その重要性は，両者間に婚姻・親族の関係をつくりだすようには働かない。

本稿の基礎になっているのは，われわれが1978年，1981年にペルー領アンデス高地で行った民族学的調査である（文部省科学研究費補助金による海外学術調査「中央アンデス農牧民社会の民族学的研究」研究代表者 増田昭三)。また，本稿の骨子は，1983年にフロリダ州シーダー・キーで行われたシンポジウム「An Interdisciplinary Perspective on Andean Ecological Complementarity」において発表した [Tomoeda and Fujii 1985]。

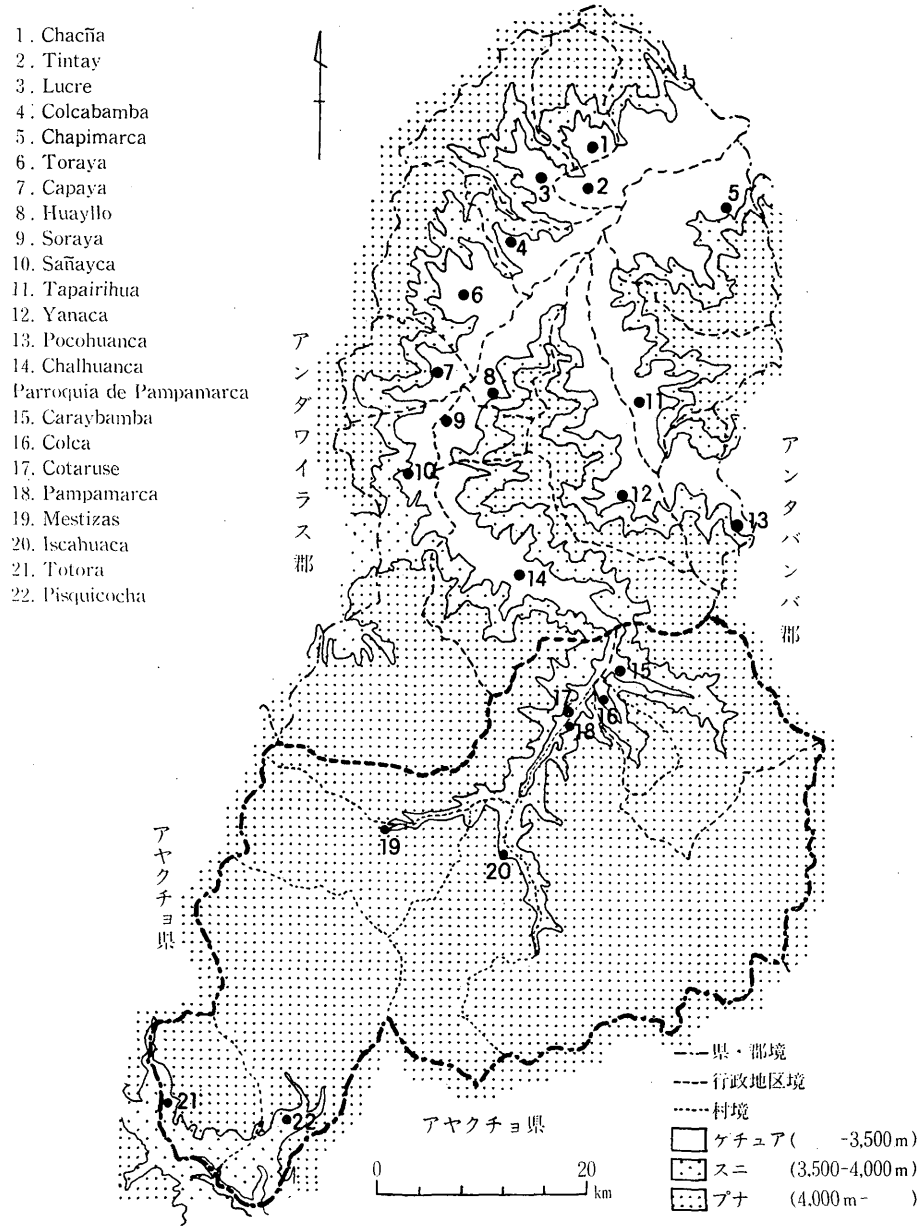
Ⅱ．パンパマルカ教区

1. 調査地域

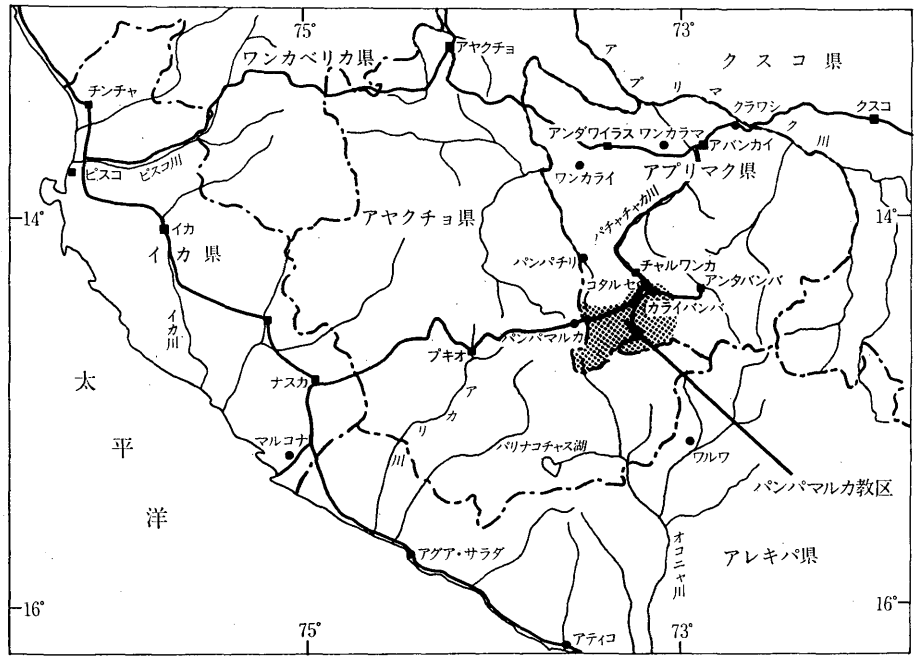
調査対象地域のパンパマルカ教区は，アイマラエス郡南部に位置する。教区内にはカライバンバ (Caraybamba) とコタルセ (Cotaruse) の2つの地方行政区 (Distrito) があるが，これらの地方行政区はさらに，カライバンバ，コルカ (Colca)，コタルセ，パンパマルカ，メスティサス (Mestizas)，イスカワカ (Iscahuaca)，ピスキコチャ (Pisquicocha)，トトラ (Totora) の8つの村に分かれる（地図1)。

地形的にみると，この地域はいわゆるアンデス高地部 (sierra) に入り，1番低い所で標高 3,050 m，高い所で 5,160 m の範囲にあるが，全体として南部は 4,000 m 前後の高原，北部はコタルセ，カライバンバの両川によって刻まれた谷となっている。コタルセ川は教区のほぼ中央を北へ流れ，カライバンバ川と合流してチャルワンカ川，パチャチャカ (Pachachaca) 川と名を変え，県都アバンカイ近くでアプリマク川に注ぐ。アプリマク川はさらにアマゾン河の主要支流の1つであるウカヤリ (Ucayali) 川に注ぐので，この地域はアマゾン河の流域であるという意味でアンデスの東斜面に入る。ただし，一部の地域すなわちピスキコチャとトトラは太平洋に注ぐオコニャ (Ocoña) 川上流部に位置するので，アンデスの西斜面に属すことになる（地図2)。このように，海岸に比較的近い高地部である点が本調査地域の1つの特徴である。

教区の人口は，1961年の国勢調査の結果によれば，コタルセ区3,237人，カライバンバ区1,881人 [Mar de la Torre 1979: 203, 227]，1971年にはそれぞれ3,417



地図1　アイマラエス郡の行政地区とパンパマルカ教区（太線内）の村



地図2　ペルー中南部

人，1,668人となっている [ONEC　1974: 586–587]。面積はコタルセ区 1,300 km², カライバンバ区 360 km² であるから [Mar de la Torre　1979: 203, 227]，1971年の人口を基礎にした人口密度は，コタルセ区で2.6人/km²，カライバンバ区で4.6人/km² となる。この違いはコタルセの方が人口密度の低いプナが広いためである。

南海岸のナスカ (Nazca) と南高地のクスコ (Cuzco) 間を結ぶ国道26号線が，教区の中心部を通過しているので，郡都チャルワンカ，県都アバンカイとの往来が容易であるばかりでなく，海岸，高地のいずれとも直接往来できる。また，カライバンバにはアンタバンバ (Antabamba) へ通じる県道104号線が通っており，村から4 km の地点で国道と結ばれている。国道にはクスコあるいはアバンカイと首都リマを結ぶ定期バスが運行している。定期バスは乗客のみならず，手紙や小荷物も運ぶので，これらの都市との通信・交通・輸送の便は良いといえよう。

2.　自　然　環　境

中央アンデスの自然環境に関しては様々な区分法があるが，ペルーの地理学者 Javier Pulgar Vidal は，ペルーの自然環境を，主として高度・植生に従って，チャラ (*chala*)，ユンガ (*yunga*)，ケチュア (*quechua*)，スニ (*suni*)，プナ (*puna*)，ハンカ

(*janca*)，ルパ・ルパ (*rupa-rupa*)，オマグア (*omagua*) の8つに分けている [PULGAR VIDAL n.d.]。このうち，東西アンデスの低地部であるチャラとユンガ，アマゾン低地部であるルパ・ルパとオマグアはアンデス高地部であるこの教区にはない。しかし，チャラとユンガは，後述のように牧民の交易活動の範囲には入っている。

① チャラ（海岸）　中央アンデスの海岸沿いの標高 500 m までの地域。降雨はほとんど無いが，1年の半分は海霧に覆われ，その水分で草が育つ。河川沿いのオアシスは，豊かな耕地となっている。また，海産物が豊富で，後述の海藻類もその1つである。

② ユンガ（暑い谷）　中央アンデスの西斜面(太平洋側斜面)の標高 500–2,300 m の地帯。1年を通してほとんど雨が降らず，また，海霧も届かないため非常に乾燥している。年間の日照量は3,000時間を越え，日中の気温も 30°C 近くまであがるが，夜は高所から吹く風があって比較的涼しい。このユンガ地帯は，東斜面では 1,000–2,300 m の辺りにあり，西斜面に比べて雨量ははるかに多い (雨期に 400–1,000 mm)。この教区内には海岸（チャラ）およびユンガはないが，教区内の牧民はコカや果実を求めてこれらの地帯へ旅をしている（後述)。

植生の基本は，乾燥した土地に強いモリェ (*Schinus molle*)[1]，ワランゴ (*Acacia macracantha*) などの樹木，リュウゼツラン (*Agave* sp.) や各種のサボテン (Cactaceas) などである。谷底や斜面で川の水が利用できる所には，熱帯産の作物や果実，例えばマニオク (*Manihot esculenta*)，サトウキビ (*Saccharum officinarum*)，アボカド (*Persea gratissima*)，ルクマ (*Lucuma obovata*)，パパイヤ (*Carica papaya L.*)，バナナ (*Musa* spp.) などが栽培されている。実際は，水を利用できる所が非常に限られているため耕地は少なく，ユンガ地帯だけで大きな人口を養うことはできない。

③ ケチュア（温暖な谷）　海抜 2,300–3,500 m に位置する谷や盆地。平均気温が 11°～16°C (最高 22°～29°C, 最低 −4°～7°C) で，気候は温暖である。ユンガに比べて谷の斜面は幾分かゆるくなり，所によっては谷底にかなり広い平地を持つ。カハマルカ (Cajamarca)，ワラス (Huarás)，ワンカヨ (Huancayo)，アヤクチョ (Ayacucho)，アバンカイ，クスコなどの高原地帯の都市は，こうしたケチュアの大きくて広い谷にある。Pulgar Vidal は 3,500–2,300 m の高度帯をケチュアと呼んでいるが，教区の住民はこのケチュアを 3,500–3,000 m の高いケチュア帯と，それ以下の低いケチュア帯に分けている。教区の農民の村はいずれも高いケチュアにあり，次のスニとつながっている。アンデスの農民たちはケチュアの谷をもっとも恵まれた

1) 本文中の学名は，Pulgar Vidal [n.d.] 及び Soukup [1970] による。

豊かな所だと考えている。何故なら，充分な日光と水，適当な気温を必要とするトウモロコシ (*Zea mays*) が，ここにはよく育つからである。

④　スニ（冷涼な高地）　海抜 3,500 m つまりケチュア帯の上限から 4,000 m までを農民たちはスニあるいはハルカ (*jarca*) と呼んでいる。岩の多い傾斜地が多く険しさが増す。ケチュアに較べて気温はずっと低く，乾期（4～6月）の夜間には氷点下 10°C になることも稀ではない。スニに特徴的な植物にはヘニョア (*Polylepis racemosa*)，キスワル (*Buddleias incana, B. globulosa, B. coriacea*)，サウコ (*Sambucus peruviana*) などの樹木，タヤ (*Leoidophyllum*)，モトゥイ (*Cassia* sp.)，カントゥタ (*Cantua buxifolia*) などの灌木があるが，農民にとってスニが意味を持つのは，ここがアンデス高地の農耕限界となっていることである。この高さでは気温が低すぎてトウモロコシは育たないが，ジャガイモ (*Solanum* spp.) その他の根茎類，アカザの仲間であるキヌア (*Chenopodium quinoa*)，豆の1種であるタルウィ (*Lupinus tauri, L. mutabilis*) などはまだ耕作が可能である。スニがケチュア語で「高い」を意味することからわかるように，高地の農民にとってはスニがケチュアと連続する高い所であり，ケチュアとスニからなる1つの谷全体が主たる生活圏となっていることが多い。パンパマルカ教区の農民はすべてこのタイプである。

⑤　プナ（寒冷な高原）　一般に 4,000 m を越える高地は起伏がなだらかになり，所によっては広大な高原になっている。年間の平均気温は 0°～7°C 位で，夜間の気温が氷点下 25°C を記録したこともある。しかし，太陽が照っている昼間は思ったより暖かく，9月から4月にかけての最高気温は 15°～22°C になる。寒冷な高原のプナには，樹木らしい樹木は生えず，イチュ (*Stipa ichu*) と呼ばれているイネ科の草が一面に生えている。このイチュや湿地帯に生える苔類を牧草にして，プナではアルパカやリャマの飼育が盛んに行われている。

⑥　ハンカ（雪山）　中央アンデスの万年雪や氷河の下限は 4,800 m 前後で，このあたりになると数種類の苔を別にすると植物は乏しい。高地の住民たちがハンカとかラス (*rasu*) と呼んでいる 4,800 m 以上の高地になると，さすがにアンデスでもその所在は限られ，山脈沿いに帯状につながっているというわけにはいかない。対象地域内では，カライバンバ地区にあるピステ山の山頂付近がこの区分に入るのみである。

地図1にも示したように，パンパマルカ教区の大部分はプナであり，わずかにコタルセ川，カライバンバ川などの両岸にケチュア，スニがみられる。そこにはカライバンバ，コルカ，コタルセ，パンパマルカなど，ケチュアでのトウモロコシ，スニでのジャガイモを主とした根茎類の耕作を主な生業とし，一部でプナでの牧畜も行う農民

の村がある。一方,川の上流部に位置する村はケチュア帯を欠くばかりでなく,スニの範囲も狭い。そのため，ピスキコチャ，トトラ，イスカワカ，メスティサスなどには，プナにおけるリャマ，アルパカ，ヒツジの牧畜を主な生業とし，狭いスニを利用してジャガイモの耕作を行う牧民の家が散在している。ケブラダ（谷）にある農民の村は，常に人家の集中した集落を形成しているが（カライバンバ362軒，コルカ106軒，コタルセ247軒，パンパマルカ197軒），プナの牧民の村には大きな集落は存在せず，村の中心でも10～20軒の家がかたまっているにすぎない [ONEC　1974: 586–587]。なお，熱帯産の作物や果実の耕作が可能なユンガは，この教区内には存在せず，同じアイマラエス郡の最北端タパイリワ (Tapairihua) 地区（カライバンバから直線距離で約30–40 km 北）で，オレンジ，レモン，アボカドなどがわずかに栽培されているにすぎない。

次章では，この教区内の環境利用を谷の農民とプナの牧民を例にして，具体的に記述する。

Ⅲ．農民と牧民の生活

1.　農民の生活（カライバンバの例から）[2)]

カライバンバはパンパマルカ教区の最北端にあり，同名の川の両岸及びその上流部のプナを村の範囲とする。村で1番低いシチ (Sichi, 3,050 m) から，ピステ山の頂上 (5,160 m) の間にわたるケチュア・アルタ，スニ，プナを利用して，農耕を主とした生業に従事している。村の中心は国道26号線から分かれた県道 104 号線を 4 km 入った 3,310 m の高さの緩い傾斜地に立地している。ここに村の住民の約80％が集中し，残りの20％は谷の上流部やプナに小規模な集落を形成している。

住民の大部分は，上記の村内の耕地・牧草地を利用して農業と小規模な牧畜を営んでいる。地形的には右岸の方が左岸より面積は狭いが，傾斜が緩やかで近づき易い。一方，左岸の方はプナへの登りが崖状になっているが，北斜面のため右岸より日照条件は良い。

村内の耕地，牧草地あるいは薪用の雑木林は，すべての住民により利用されている。住民は耕地の高度限界を「モンテ (monte) が終る所まで」といっている。これを前述の Pulgar Vidal の環境区分に従えば，スニの上限 (4,000 m) に相当するが，ここではスニとよばずケブラダ・アルタ (quebrada alta＝上の谷)，モンテ，またはオ

2) カライバンバに関しては，筆者等によるより詳しい報告がある [Fujii y Tomoeda　1981]。

写真2　カライバンバの谷と集落（中央）

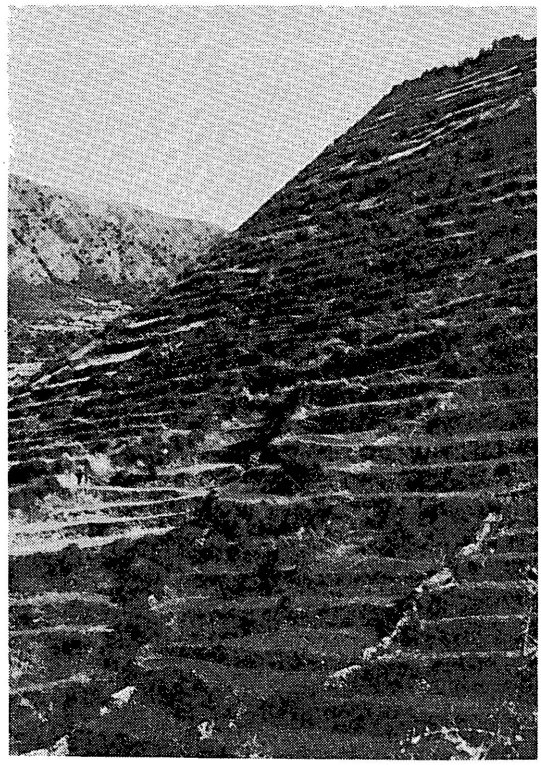


写真3　階段耕地

ルホ (*orqo*) とよんでいる。一方，その下に位置するケブラダ・バハ (quebrada baja＝下の谷) は，カライバンバ川の谷底からチャクラ (chacra) とよばれる階段耕地の終る所までの範囲を指し，高さ 3,310 m に位置する集落は階段耕地の中央に位置する (写真２)。このケブラダ・バハは別のいい方のケチュア・アルタに相当する。

階段耕地は大体 3,100–3,500 m の範囲に広がり，すべて村の住民の私有地である (写真３)。そこでは灌漑・犂耕・トウモロコシという農耕技術複合がみられる。階段耕地の上限 (3,500 m) から耕地限界 (4,000 m) までは，耕地利用の面からはライメ (*laime*) とよばれており，無灌漑（天水）・踏みすき・ジャガイモという別の農業技術複合がみられる。

耕地限界より上は，草地に灌木が散在するゆるやかなプナあるいはパホナル (pajonal) になる。そこは，ワニャ (*wañna*) とよばれる 4,200 m の高さまで耕作できるジャガイモの１種を除いて農耕には利用されず，4,200–4,500 m のプナ・アルタ (puna alta＝高いプナ) はラクダ科動物の，それ以下のプナ・バハ (puna baja＝低いプナ) はウシの放牧に利用されている。

しかし，これらの環境利用区分はあまり厳格なものではなく，また，作物栽培の限界を示すものでもない。事実，3,500 m 以上の所でトウモロコシを耕作している例もある。また，階段耕地の中で踏みすきを使ってジャガイモの播種をしている例もあるし，ライメで犂を使ったり，小規模な灌漑を施している場合もある。3,500 m をトウモロコシ耕作の限界とすれば，１番低い場所（シチ）の階段耕地は 450 m の高度差を持っているが，１番高い場所であるケチュアパタ (Qechuapata) ではわずかな耕地があるにすぎない。

階段耕地は谷の両岸に展開しており，家族単位の労働で基本的にはトウモロコシを耕作するが，キヌア，エンドウマメ，コムギ，ジャガイモなどを小規模に耕作することもある。ジャガイモを階段耕地で耕作する場合ミチカ (*michika*＝早生) といい，８月か９月に播き，灌漑を施し，１月か２月に収穫する。さらに，谷のもっとも低い場所ではカボチャ，セロリ，タマネギその他の野菜を栽培する。また村のミスティ (misti＝メスティソ：白人系の有力者) の中には，所有している乳牛のためにアルファルファを栽培している人もある。住居の周辺の囲われた畑 (solar) は，トウモロコシの他タマネギ，ロコト（rocoto＝トウガラシの１種）などの野菜，儀礼や祭りに不可欠なカーネーションなどの花栽培に利用する。

階段耕地のトウモロコシ畑は休閑せず，灌漑と肥料を施して毎年耕作される。播種は９～10月に行われるが，ミチカ・サラ (*michika sara*＝早生トウモロコシ) は８月に

播かれる。播種は日照時間が少ない右岸から開始され，また，熟す期間が長い種類は，低い畑に他の種類よりやや早く播かれる。トウモロコシの品種はウルキヨ (*urquillo*)，チュンピ (*chumpi*)，パタパワイクイ (*patapawaykuy*) など12種が知られている。また，果穂の大きさによりウチュイ・ムホ (*uchuy muqo*＝小)，チャウピ・ムホ (*chaupi muqo*＝中)，ハトゥン・ムホ (*hatun muqo*＝大) の3つに分けられる。チュンピ種には3つの大きさすべてがあるが，ウルキヨ種は大のみ，パタパワイクイ種は小のみしか産しない。パタパワイクイ種は他の種類より早く熟すので，時期的には最後に，階段耕地の一番高い場所に播かれるが，あまり大きくはならない。ハトゥン・ムホは1番低い部分に8月に，チャウピ・ムホは中間の高さに9月に播かれるが，パタパワイクイ種の播種は11月の初めでも可能である。このように，トウモロコシは8月から10月までの間に播かれるが，収穫はすべて6月にそろって行われる。

播種の後，芽が出てから土寄せを2度行う。その後草取りをして6月に収穫する。収穫した果穂は畑で乾燥した後村に運ぶ。家の2階の倉庫に果穂のまま貯蔵し，必要に応じて粒をほぐして使う。トウモロコシの使い方は種類によって違う。モロチュはチチャ酒を作るためのもやしとして，アルミドンとグラナダはカンチャ (*cancha*＝煎りトウモロコシ) として，チュンピはモティ (*moti*＝ゆでトウモロコシ) として使う。実際には，収穫したトウモロコシの大部分，おそらく70%はチチャ酒に加工される。カライバンバでは「石を1つ持ち上げるにもチチャを要求する」というほど大量のチチャを日常的に消費する。そのため住民の中には，カライバンバではトウモロコシの多くが酒になってしまうので，食べものとしては不足しているという人もある。

ライメは階段耕地の最上部の高さ 3,500 m から 4,000 m のモンテが終る所まで，つまり Pulgar Vidal のいうスニ帯にあり，ジャガイモその他の根茎類が栽培される。カライバンバの住民はジャガイモの質と量に関して誇りを持っており，「カライバンバはジャガイモの村である」と繰り返しいう。前述のように，ライメにはスニ帯を利用するための天水，踏みすき，ジャガイモという農耕技術複合があるが，ジャガイモの他にオカ (*oca*: *oxalis tuberosa*)，マシュワ (*mashuhua*: *Tropaeolum tuberosum*)，オユコ (*ullucu*: *Ullucus tuberosus*)，キヌア，オオムギ (cebada)，ソラマメ (haba) なども少量栽培されている。

ライメは村の共有地であり，そこでのジャガイモ耕作は毎年場所を変えて行われる。カライバンバには10以上のライメがあり，休閑中のライメは家畜，特にウシの放牧地として利用される。ジャガイモの播種は比較的短期間に行われるが，これはライメが共有地であるという性格と関連する。農民は10月がトウモロコシの，11月がジャガイ

モの播種に最も適した時期と考えている。

ライメは長期の休閑により表土が固くなり，またグラマとよばれる芝草にびっしりと覆われているため，雨期が終る3月に表土が軟らかいうちに耕起する必要がある。耕起と播種には伝統的な農具である踏みすきが使われる。カライバンバの踏みすきは，長さ 1.2 m の曲がった木の柄の先端に鉄製の刃をつけ，その上にチャキルポ (*chaquillpo*) という足をかける横木を，リャマの皮で縛りつけたものである。播種は11月にいっせいに行われる。耕起した土の塊まりを砕き，男女1組で仕事を始める。男が両手で踏みすきの柄を持ち片足を横木にかけ，刃先を土に突き入れ，土を少し持ち上げるために柄の先端を手前に引きさげる。一方，男に向い合った女は，持ち上げられた土くれの下に種イモを入れる。男が後ろにさがりながら刃を抜くと，種イモは土に覆われる(写真4)。播種が終ると，芽が出るのを待って土を寄せる。土寄せを2度行った後，さらに草取りを1度行う。5月に収穫したジャガイモの大部分は，畑の中か傍に掘った深さ 1.5 m, 径 1.2 m ほどの貯蔵穴に貯蔵する。家に保存したジャガイモの量が少なくなってきたら，貯蔵穴から出して補充する。穴の1番下に残ったイモは翌年の種イモになる。畑の近くにジャガイモを貯蔵することは，長期にわたり生の状態で保存できることの他に，翌年別のライメに種イモを運ぶ手間を省くことにもなる。

ジャガイモはカライバンバの住民の主食であり，種類，大きさによって使い分けられている。ワニャはモラヤ (*moraya*=水さらし凍結乾燥イモ) にする。一般に大きなジャガイモの大部分は食用にし，中位のものは種イモに，小粒のものはチュニョ

写真4　ライメでのジャガイモの播種

(*chuño*＝凍結乾燥イモ）に加工する。チュニョの加工は，6月から7月に村の背後の4,000 m 近い高地で行われる。高地は気温の日較差が大きいため，チュニョ加工に必要なイモの凍結と解凍に適しているからである。チュニョの他にココパ (*kokopa*) というゆでたジャガイモを野外で凍らせたもの，オユコをココパのように加工したマユョ (*mallullo*)，さらに，トウモロコシを同様に加工したチュチュカ (*chuchuka*) などが作られる。これらの加工食品作りは，すべて家族単位で行われる。

プナの草地は 4,000 m 以上の高地に広がっている。ここではワニャを除く農作物の耕作が不可能であるため，もっぱら牧畜に利用している。プナのうち 4,200 m 以下にある部分はウシやウマの放牧地となるが，4,200 –4,500 m の範囲はリャマ，アルパカといったラクダ科動物の飼育に限られる。ラクダ科動物を飼育する牧民は，ヤクタルナ (*llaqtaruna*＝村に住む人）から，プナルナ (*punaruna*＝プナの住民）あるいはリャマミチフ (*llamamichiq*＝リャマ飼い）とよばれている。牧民は自分たちのリャマやアルパカを所有しているだけでなく，村の住民から数百頭の飼育を委託されることもある。リャマやアルパカは単に毛を利用するだけでなく，肉も食用になる。リャマの毛はロープやコスタル (costal＝穀物袋）の材料になる。アルパカの毛刈りは2月か3月の雨期に行うが，1頭のアルパカは2年に1度しか毛を刈ることができない。

カライバンバのプナには，アヤヤカ (Allallaca; 4,300 m)，ホリ (Joli; 4,300 m)，パンピョ (Pampillo; 4,450 m)，エスキナ (Esquina; 4,550 m) などのリャマミチフの小集落がある。1年の大部分の時間を農耕に従事する村の住民にとっては，プナに放牧するラクダ科動物の管理は非常に困難である。そのため，これらの動物の管理を牧民に委託せざるを得ない。しかし，休閑しているライメに放牧されているウシは，数が少ないので時々行って様子をみたり，家族内で仕事を分担して管理することができる。ウシは，犂耕用の去勢牛としての役目の他に，搾乳もするが（飲用ではなくチーズ製造用が主），主な目的は食肉牛として売ることであり，自分たちが肉を食べるために殺すことは稀である。ただし，祭の時カルグヨフ (*carguyoq*＝村役）が宴会のために1頭提供することはある。

2.　牧民の生活（ピスキコチャの例から）

ピスキコチャは，西隣りのトトラと共にパンパマルカ教区の最南端に位置する。村の中心部は太平洋へ注ぐオコニャ川の源頭に近い狭い谷に位置し，高さは 3,900 m である。村の最も低い土地でも標高 3,400 m の高さであるため，トウモロコシの耕作に適した耕地はほとんど無い。そのため，生活はジャガイモなどの根茎類の耕作と，背

後のプナでの牧畜，及び海岸での海藻採取に頼っている。この村のプナは，同じような環境にある隣村トトラを除いた教区の他の村と比較して，乾燥度が強いため牧草地としての条件は劣る。村単位の農牧産物統計がないので，正確には判断できないが，おそらく単位面積あたりの家畜の数は，他のプナの村に比べて少ないと思われる。また，アルパカの飼育に適したボフェダル（bofedal＝湿地）がほとんど無いため，アルパカの数は少なく，リャマとヒツジの飼育が主となっている。

以下にふれる村の住民の話では，中心部には約80家族が住むというが，1972年の国勢調査によればピスキコチャ全体（分類は pueblo となっている）で家屋数30軒，人口は162人である [ONEC　1974: 587]。現在，幹線道路から村へ通じる自動車道の建設が住民の手により進められており，それが完成したら村の経済状態も良くなると期待している。

フリオ・パロミノ (Julio Palomino) はピスキコチャの村人の1人で，当年37才になる。村では貧しい方で，リャマを15頭位しか飼っていない。500頭飼っていれば金持ちといえる。ピスキコチャの中では，20〜30頭の人，50頭位の人など家畜の数はまちまちである。彼はピスキコチャの谷の方に住んでおり，耕地を持っている。村にはジャガイモ等のイモ類を耕作するライメが3つあり，そこを利用する他に私有地も持っている。そのためジャガイモ類には困らず，チュニョやモラヤも自分たちで作る。しかし，トウモロコシはピスキコチャではほとんどできないので，他所から手に入れなければならない。村の住民の中にコタルセにトウモロコシ畑を持っている人もいるが，そこまで歩いて2日もかかり，畑を利用するのに都合が悪い。

この年（1981年）彼は18才の息子を連れて，6月の終りにアグア・サラダ (Agua Salada) にコチャユヨ（*cochayuyo*＝海藻）を採りにでかけた。炊事用具，トウモロコシ，チュニョなど若干の食糧，寝具用のヒツジの毛皮などを5つの包みにして，海岸へ行く車の便がある幹線道路が通るパンパマルカ（アヤクチョ県にある別の村）まで出て車を待ったが，ここまではリャマの背に荷物をかつがせてきた。当時ピスキコチャからは10家族位がコチャユヨ採りに出ていた。彼が行ったアグア・サラダには，大勢のコチャユヨ採りが集るので，寝泊りするための小屋がある。

彼は熟練した海藻採りではないので，1日働いて採れる量は30〜35プランチャ (plancha＝海藻を板状にしたもの) 位であるが，上手な人は海藻が沢山ある場所なら100〜150枚分の海藻を採る。熟練者は危険な岩場の先の方まで行って採ることができるからである。アグア・サラダだけでなく，アティコ (Atico)，マルコナ (Marcona)

などでも採れる。1カ所になくなれば移動することもある。もし海藻が沢山あれば，2カ月働いて300～400枚採れる。アグア・サラダにナスカやヤウカ (Yauca) から仲買い人がくるので，プランチャにしたものを売る。村に持ち帰るのはプランチャにせず，袋詰めにしている。プランチャを売った金で，コメ，麺類などを買って村に持ち帰る。

彼はこれまでにナスカ，イカ (Ica)，ピスコ (Pisco)，コブレパンパ (Cobrepampa) の鉱山で働いた経験があるが，これらの出稼ぎ労働は，短い期間でちょっとした金を手に入れるには適さない。その点コチャユヨ採りは短期に働いて，少額ではあるが必要な金を手に入れることができる。

ピスキコチャからコチャユヨを採りに行く人はプナに住む牧民だけとは限らず，彼のようにケブラダ(谷)の住民でも貧しい者がコチャユヨを採りに行く。この時節（6月）は，大部分の人が東の谷の農村へトウモロコシを求めて旅をしている。そのうちの何人かは，その後海岸へコチャユヨ採りに行くことになる。皆アグア・サラダへ行くが，同じ場所とは限らない。彼が今，他の人のようにトウモロコシのために谷へ行かないのは，買うための現金が無いからである。そのため，まず海岸へ出てコチャユヨを採り，それを売って現金を得なければならない。その金で乾燥イチジク，トウガラシなどの海岸の産物や，砂糖，コメを買い，その一部を帰途売ってまた金に換える。残りの品物と現金を家に持ち帰り，それから谷へトウモロコシを買いに行くつもりである。

彼が父親と初めてコチャユヨを採りに行ったのは，11才の時であった。今と同じように海岸に出たが，当時も商人がいて沢山買い付け，別の町へ持っていった。自分で運んでチャルワンカ，パンパマルカ(アヤクチョ県)，プキオ (Puquio) で売れば，仲買人に売るよりは儲けが少し大きい。海岸で売る値段が100～150ソーレスとすれば，プキオでは250～300ソーレスになる。彼が父親と行った頃は，15～20頭位のリャマの群れを追って海岸へ出た。旅へ出るリャマは5～6才位の雄である。ピスキコチャを出て海岸まで8～9日かかった。海岸に着くと小屋掛けし，連れてきたリャマは背後のロマス（lomas＝海霧の水分で草が育つ丘）に放しておく。ロマスは水と草が豊富なので，放牧しておいてコチャユヨ採りに専念する。

村へ持ち帰るコチャユヨはプランチャにせず，リャマの毛で作った袋に2～3アロバ (arroba: 1 arroba＝25ポンド) ずつ詰め，リャマにかつがせた。袋はトウモロコシを運ぶ時に使うものと同じで，1袋に1キンタル (quintal＝4 arroba) 入る。1頭のリャマは普通3～5アロバの荷を運べる。20頭のリャマを連れて行けば，20カルガ

写真5　海岸の産物を持ち帰った牧民

(carga＝荷) を持ち帰ることになる。ただし，採れたコチャユヨは3～4カルガを残すだけで，大半は売ってしまう。他に海岸から干しイチジク，オリーブの実，コメ，砂糖なども持って帰った(写真5)。帰りは荷物があるのでリャマが早く歩けず，10～11日と行きより2～3日余計にかかった。家に持ち帰ったコチャユヨは一部を自家消費し，残りはトウモロコシとの交換に使った。

彼は畑も持っているので牧畜に専念しているわけではないし，飼っているリャマの数も多くない。そのため，旅をする時には親類に貸してもらって連れていく。その場合，借りた頭数についての荷の半分は相手のものになる。この貸借をトゥルナ (*turna*) という。また，リャマが少なくトゥルナで旅をしているので，農民の村で収穫物の運搬を請負ってトウモロコシを手に入れるというやり方をしたことがない。トウモロコシはコチャユヨなどとの交換か，現金で買って入手する。運搬を引き受けた時には，11袋運んで1袋手に入れるということになっている。

コチャユヨを谷の農民と交換する時はオンスで量る。1オンスのコチャユヨに対し，10～20本のトウモロコシを受け取る。こうして少しずつトウモロコシを集めていく。家から家を訪ねてまわるが，農民はコチャユヨが好きで，これを使ってピカンテ (picante＝コチャユヨ，ジャガイモ，トウガラシの入った辛い料理) を作る。干しイチジクは4つ当り1ポンド，約20本のトウモロコシと交換できる。海岸で採れた1袋（1アロバ）のコチャユヨは，結局2～3カルガの粒トウモロコシに換算される。

トウガラシやロコトはケブラダや海岸で手に入れた。ロコトは谷の下のトウモロコ

シの多い地域で手に入れることができ，トウガラシは海岸のものを運んできた。海岸のオコニャ，カマナ (Camana) で沢山トウガラシを作っているので，乾燥あるいは生のトウガラシを持ち帰った。トウガラシも農民がとても好むので交換の品にした。例えば4～5個のトウガラシで，1ポンドの粒トウモロコシと交換できる。トウガラシは前述のピカンテ料理に欠かせない調味料であるので，農民がとても欲しがる品の1つである。

旅をするのは決して安全ではない。いつも盗みや強盗の危険がある。アンダワイラス，ワンカバンバ (Huancabamba) 地方はトウモロコシが豊富であるが，旅する時は危険が多く，特に注意しなければならない。チャルワンカ，コタルセなどは近くて安全だが，トウモロコシは少ないし値も高い。そのため，遠くて危険であるにもかかわらずその地方へ旅をする。ルクレ (Lucre)，サン・マテオ (San Mateo)，チャクニャ (Chacña)，カチバンバ (Cachibamba)，コルカバンバ (Colcabamba)，トゥラ (Tula) やワンカライ (Huancaray)，モエパタ (Mollepata) などは，トウモロコシが豊富な谷である。

昔コカを手に入れるため，ユンガまでリャマを連れて旅をした経験がある。クラワシ (Curahuasi) を通って，キヤバンバ (Quillabamba) の谷のコカを栽培している地方へいった。ピスキコチャからキヤバンバの谷のオホバンバ (Ojobamba) までは2週間の旅だった。キヤバンバの谷は暑いが，リャマは暑さに耐えるし牧草もある。旅をしたのは3月から5月にかけてであった。昔は海岸へ行ったり，ユンガへ行ったり，

写真6　旅をするリャマ

よく旅をしていた。もうユンガに行かなくなって久しい。20年も前，彼が息子と同じ位（18才）の時にはもう父と一緒に行っていた。コカを手に入れるのは，自分たちが使うためで，2～3キンタルを持ち帰ったが，欲しい人に売ることもあった。コカを手に入れるのは，金で買うか，チャルキ（*charqui*＝干し肉）と交換した。1アロバのチャルキで2アロバのコカが手に入った。10頭位のリャマを連れた小規模のキャラバンで（写真6），ピスキコチャを出てから牧草のある高い所を選んで旅を続け，谷へは高地から直接降りた。2週間の旅は海岸への旅より長い。この旅から帰ってから，ケブラダの農村へトウモロコシを買いに行く旅をしていた。農村への旅はリャマを数多く連れて行く。トウモロコシを入手した後，海岸へコチャユヨ採りに行くのが普通であった。谷への旅は2～3度続けてやることもあったが，8月位には海岸に出た。

ユンガの旅はコカが目的だが，ついでにトウモロコシも手に入れた。ユンカ・サラ（*yunca sara*）とかアルミドン・サラ（almidon *sara*）というもので，柔らかいし大きいのでカンチャにするのに適している。しかし，味はケブラダのトウモロコシ（ムルチュ＝*muruchu*）に比べて一段と劣る。他にコーヒーとかアチョテ（achote, *Bixa orellana*＝アナット樹の実，赤い染料として料理，染色に使用），パリヨ（palillo, *Escobedia grandiflora*＝根を乾燥し，黄色の染料として使用）などの染料，オレンジ，バナナなども少量持ち帰った。ユンガに旅する時にもコチャユヨを持って行ったことがある。チャルキと一緒に交換の品として持って行った。ユンガではコカとコチャユヨは同じ値うちとされていたから，同じ重さで交換しあった。

塩を手に入れるためにはアレキパ（Arequipa）県のワルワ（Huarhua）に行く。ワルワのプカ・カチ（*puca cachi*＝赤い塩）をケブラダへの旅に持って行き，トウモロコシと交換する。ワルワの塩の味は格別で海の塩とは比べものにならない上，身体に良いとされている。ワルワまではピスキコチャから5日間の道のりであり，10頭のリャマを連れて行った。4袋の塩，つまり10キンタルを持ち帰った。9～10月にケブラダへ旅をするので，これをコチャユヨと一緒に持っていくつもりでいる。塩は1キンタル2000ソーレスでかなり高い。昔は安かったが，近頃は大変値上りしてしまった。

以上，カライバンバの農民とピスキコチャの牧民を例にして，パンパマルカ教区内の環境利用を説明した。

カライバンバの例からもわかるように，この地域の農民は谷沿いの斜面の下部に作られた階段耕地でのトウモロコシ，及びその上の傾斜地に広がるライメでのジャガイモ耕作により，基本的な食糧を確保する。また，家の周りの庭畑での野菜類の栽培，

各家庭の庭や台所でのニワトリやクイ（*cuy*＝ギニア・ピッグ）の飼育，さらにライメからプナ下部にかけてのウシやヒツジの飼育などにより，必要に応じて蛋白質を摂ることができる。カライバンバのように，3つの生態環境がバランス良くみられる地域は，それぞれの環境を利用してほぼ自給自足の生活を送ることができる訳である。このような条件は程度の差こそあれ，コルカやコタルセでも認められる。ただし，パンパマルカは，ケブラダの村である点は同じであるが，これらの3つの村に比べてプナの範囲が圧倒的に広いという違いがある(地図1参照)。当然そこには，より多くの牧民がいて不思議ではないが，残念ながら住民の職業別人口に関する資料は存在しない。

一方，ピスキコチャの方は，始めにも述べたように西斜面にあるという点で，トトラを除く他のプナの村とは少し違う性格を持っている。同じプナの村であるメスティサスとイスカワカは，牧草地の面積が広いばかりでなく，アルパカの飼育に適したボフェダルが多い。そのため，この2つの村で飼育されているラクダ科動物の数ははるかに多く，1家族で1,000頭以上所有している例すらある（写真7，8)。パロミノもいっているように，海岸へコチャユヨ採取に降りていくのは，貧しい人に限られる。最近アルパカの毛が高値で売れるようになったため，この2つの村からコチャユヨ採取に行く人はまずないし，同じことは，カライバンバやパンパマルカの牧民についてもいえる。しかし，逆にメスティサスとイスカワカには，ライメが狭いばかりでなく村の中心からかなり離れた場所にあるという悪い条件もある。また，東斜面にせよ西

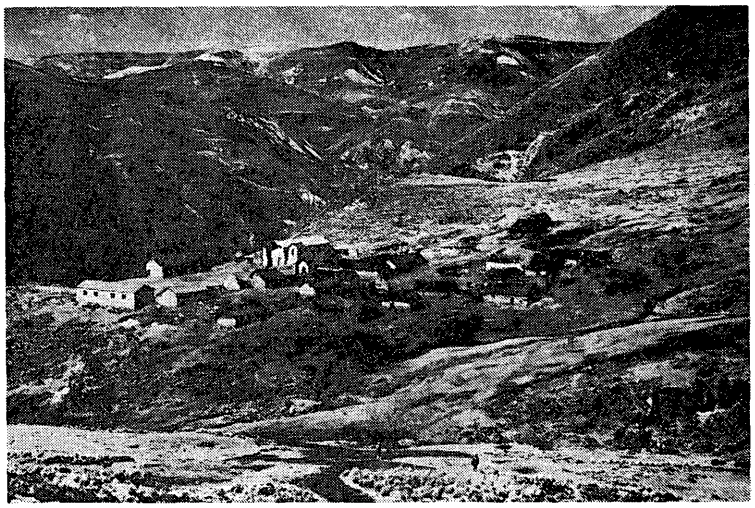


写真7　牧　民　の　村（イスカワカ：3,900 m)

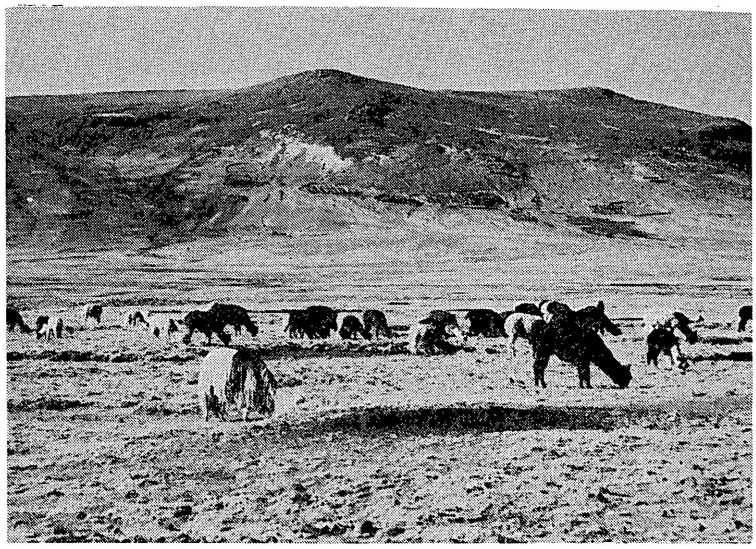


写真8　リャマ・アルパカの放牧

斜面にせよ，これら4つのプナの村にはトウモロコシが耕作できる低い耕地は全くないという条件は同じである。そのため，トウモロコシを手に入れるためには，谷の農村への旅をする必要がある点では，あまり大きな差は無いといってよい。このようなプナの牧民と谷の農民の経済関係については次節で述べる。

3.　農民と牧民の経済的補完関係

カライバンバの例をみると，谷の農民はケチュア帯でのトウモロコシとスニ帯でのジャガイモその他の根茎類の耕作，そしてスニ帯でのウシ・ヒツジの飼育により，食糧や獣毛に関してはほぼ自給自足の生活が可能であることがわかる。このような情況は，教区内のコタルセ，コルカでも同様である。ただし，パンパマルカは村域内に広いプナを持つ点でやや他と異なる。プナの牧民は，ピスキコチャの例からもわかるように，ライメが狭いので，主食としてのジャガイモの絶対量が不足している。そのうえ，村域内にケチュア帯がないので，トウモロコシを耕作することができない。トウモロコシは祭りや儀礼に使うチチャを作るために，アンデス高地の農牧民にとって必要不可欠のものである。

また牧民の村は，それぞれの村の環境，面積によって家畜，特にラクダ科動物の飼育数が異なる。前述のように，ピスキコチャやトトラは乾燥したプナが大部分であるため，メスティサスやイスカワカに比較してアルパカの飼育数は少ない。一方，谷の農民にしても，毛織物，ロープ，穀物袋，オンダ（honda＝投石具）などを作るため

のリャマやアルパカの毛は決して十分ではないし，塩，トウガラシ，チャルキ，干しイチジク，リンゴなどの調味料や嗜好品は，自分で町へ出て買わない限り，牧民が交換品として持ってくるのを待たねばならない。また，収穫期の労働力や運搬のための家畜も不足しているため，これらの仕事を牧民に頼らざるを得ない。さらに，前述のようにケブラダ地区の農民がプナのラクダ科動物を管理するのは，距離的な問題から難しいため，プナの牧民に飼育を委託するのが普通である。このような情況が農民と牧民の間に経済的補完関係が成立する基盤となっている。

ところで，農牧民間の経済的関係は，本稿で取り上げたパンパマルカというカトリックの教区とはもちろん無関係である。牧民の活動範囲は，前述のピスキコチャの例からもわかるように，教区の範囲を越えたもっと広い地域に及んでいる。そこで，調査の範囲をアプリマク県南部全域に広げた結果，同じ農民・牧民といっても生態環境の違い，及びその結果としての作物・家畜の種類の差などにより，2ないし3のタイプに分けられ，それがそれぞれの村の住民間の経済的補完関係と密接に結び付いていることが明らかになった（図3）。

タイプ	生業	生態環境	村の名（中心集落の標高）	経済関係（交易品）
牧民1	ラクダ科動物飼育	プナ	メスティサス (4,100 m)	（毛，肉，織物，現金）
牧民2	ラクダ科動物飼育＋ジャガイモ耕作	プナ（プナ＋スニ）	イスカワカ ピスキコチャ (3,900 m) トトラ (3,800 m)	（毛，肉，運搬，ラクダ科動物飼育委託）
農民1	ジャガイモ＋トウモロコシ耕作＋家畜飼育 （ジャガイモ≧トウモロコシ＋ラクダ科動物＋ウシ）	高いケブラダ （プナ＋スニ＋ケチュア・アルタ）	コタルセ (3,250 m) カライバンバ (3,300 m) コルカ (3,350 m) パンパマルカ (3,400 m)	（ジャガイモ）
農民2	ジャガイモ＋トウモロコシ耕作 （ジャガイモ≦トウモロコシ＋ヒツジ and/or ウシ）	低いケブラダ （スニ＋ケチュア・バハ）	チャルワンカ (2,900 m) ヤナカ (3,150 m) チャクニャ (2,850 m)	（トウモロコシ）
農民3	ジャガイモ＋トウモロコシ耕作 （ジャガイモ≦トウモロコシ）	低いケブラダ （ケチュア・バハ）	ワンカライ (2,900 m) ワンカラマ (2,950 m)	（トウモロコシ）

図3　アプリマク県南部における牧民と農民の分類と経済的補完関係

教区内には，トトラ，ピスキコチャ，メスティサス，イスカワカの４つの牧民の村があるが，このうちメスティサスを除いた３つの村は，プナの面積があまり広くない，あるいは乾燥度が強いため草地が少ないなどの理由により，ラクダ科動物の数は少ない。そのため，交易は主として近くのケブラダの農村へ小さなキャラバンを組んで行く。１度に手に入るトウモロコシの量は少ないので，交易の旅の回数は多いし，後述のメスティサスの牧民のように，現金で購入するよりも，物々交換あるいは作物の運搬を請負って必要なものを入手する。交換物の中には，ピスキコチャの例のように海岸の産物も含まれている。

一方，メスティサスは草地が広くボフェダルに恵まれているので，アルパカを多く飼育しており，主要産物はアルパカの毛である。リャマの数も多いので，交易の旅は40〜50頭のリャマを連れ，トウモロコシの多いアンダワイラス郡のワンカライやワンカラマを目的地とする。旅は通常，年に２度（収穫期の６月と雨期に入る前の９月から10月頃）行い，交易品としては，ラクダ科動物の毛，乾肉，毛織物，ロープなどを持って行くが，最近は現金で取り引きすることが多い。

以上のように，牧民がトウモロコシを入手する方法は２つある。１つは，収穫期に谷の農村へ降り，作物の収穫作業や収穫物を畑から村へ運ぶのを手伝い，一定の量のトウモロコシを手に入れる方法である。通常11袋運んで１袋の作物を受け取る。ピスキコチャやイスカワカの貧しい牧民は，リャマをあまり多く飼っていないうえ，現金を持っていないこともあり，チャルワンカやヤナカ (Yanaca) のような近くの谷で物々交換あるいは運搬を請負ってトウモロコシを得るほかない。これらの農村は，トウモロコシはカライバンバやコタルセに比べて豊富であるが，ジャガイモ耕作のためのライメが少ない。また，ラクダ科動物はもちろん，ウシやヒツジなどの家畜も不足しているので，牧民が交換物として持ってくる乾肉，獣毛などの需要が多い。

もう１つは，現金で買う方法である。この方法は，前述のようにメスティサスの住民が主に行う方法である。彼らはトウモロコシを求めて，遠くアンダワイラス郡のワンカライやアバンカイ郡のワンカラマまで旅をする。なぜなら，近くの農村であるカライバンバやコタルセでは，トウモロコシが耕作できる 3,500 m 以下の耕地面積が十分ではないので，トウモロコシを交換物として提供できない家が多い。そのため，必要な量のトウモロコシを得るためには何軒もの家をまわって集めなければならない。一方，ワンカライやワンカラマにはトウモロコシ畑が多く，多量のトウモロコシを短期間で入手することができる。そのため，距離的には遠いにもかかわらず，メスティサスの牧民はこれらの村へ旅をする方を選ぶ。つまり牧民からすれば，経済的な観点

では，低いケチュアの農民との関係をより重要視しているといえるのである。

アンデス高地の農牧民は，基本的には大きな高度差のある生態環境を利用して，自給自足の生活を送っているとされるが，実際には以上のような経済的補完関係なしには，生活に必要な物を入手できないという姿の方が一般的である。その際，動く方は運搬手段であるリャマを持っている牧民であり，農民はただ彼等がやってくるのを待つのみである。最近アルパカの毛が国際的に高値となった結果，牧民の多くが金持ちになり，従来なら交換物を持ってきたのに，すべて現金でトウモロコシを買う例が増えた。その結果，農民，特にワンカライやワンカラマのように作物のほとんどすべてがトウモロコシである農民は，必要な獣毛や乾肉，あるいはトウガラシやオリーブの実，コチャユヨ，果物などの海岸の産物が入手できなくなってしまい困っているという話は，アンデス高地における牧民の役割りを端的に示すものであろう。

Ⅳ．農民と牧民間の結婚

前節で述べたように，トトラ，ピスキコチャ，メスティサス，イスカワカの住民は，4,000 m 以上のプナ帯を生活圏とし，ラクダ科動物のリャマ，アルパカの飼育に従事し，小規模ながらジャガイモ類の耕作も行っている。一方，パンパマルカ，コタルセ，コルカ，カライバンバの住民のほとんどは，標高が高く狭い谷のスニ帯 (3,500–4,000 m) でジャガイモ類を耕作し，ケチュア帯上部 (3,000–3,500 m) ではトウモロコシその他の穀類を栽培し，小規模ながらウシ，ヒツジの飼育も行っている。前述のように，牧民と農民の産物交換を基本にした経済的な補完関係は，パンパマルカ教区という限られた範囲でも成り立っている。しかし，教区の牧民の交易関係はそればかりでなく，さらに下流のケチュア帯下部 (2,000–3,000 m) の地方にまで広がっており，教区の牧民にとっては，むしろ後者の低いケチュア帯の農民との関係が，経済的な効率からすればより重要である。

そこで，ここでの設問は，もし経済的な補完関係が相互にとって重要であるとしたら，その関係を通じて，あるいはそれを維持強化するため，農民と牧民の間に婚姻・親族の関係が成り立つであろうか，ということである。教会の婚姻記録を調査する以前の段階で，われわれはすでにこの地域での農民と牧民間の結婚が稀であるということを，聞き込みによって確認してはいた。しかし，「稀」の程度を量的に把握する目的で，婚姻登録の集計，分析を行うことにした。

はじめに述べた Murra が提起した，「異なる生態階床の同時的利用」，あるいは

「異なる生態階床の最大限利用」という観点からすれば，異なる生態階床を同時的かつ最大限に利用するに当ってのなんらかの社会関係を暗に意味しているし，その場合に婚姻・親族関係が除外される理由は，少なくとも理論的には見出せないであろう。特にパンパマルカ教区の農民と牧民は，居住地が接近し（時には徒歩でも数時間の距離である），生業の上でもジャガイモ耕作，ウシ・ヒツジ飼育など共通した面を持っている。このような場合，徒歩で数日もかかり，生業の上でもトウモロコシ耕作に重点をおいたケチュア帯下部の農民はともかくとしても（先述のように経済的な観点では，この方が牧民と農民はより相互に必要としあっているのだが），教区内での農民と牧民間の結婚には，経済上ある程度の有効性も想定できる。

事実，Harris の調査によれば，ライミ(Laimi，ボリビア領ポトシ県北部)では，ヒツジとリャマ飼育・根茎類栽培のプナ帯 (3,800–5,000 m) と，トウモロコシ栽培のリキナ帯 (*liquina*＝谷，2,000–3,500 m) の住民間には，経済上の補完関係があるだけでなく，「数多く」の結婚が行われている [Harris　1978: 55]。また，パンパマルカ教区内でも，われわれの観察と聞き込みの範囲では，いくつかの農民と牧民の結婚例を得ており，アルパカ毛の経済価値が急上昇した最近では，牧民との結婚が有利だということが，農民のあいだにも意識されるようになっている。今後には，こうした傾向からして，農・牧民間の結婚が増える可能性もあるだけに，この時点で両者間の婚姻例を数量的に把握しておくことは充分に意味があると考える。

以下には，一定地域の範囲で内婚・外婚の比がどのようになっているかを検討することになるので，その一定範囲を次のように区分けすることにする。

- パンパマルカ教区内
  - プナ地区（トトラ・ピスキコチャ・メスティサス・イスカワカ）
  - ケブラダ地区（パンパマルカ・コタルセ・コルカ・カライバンバ）
- 教　区　外

地域内婚

1903年から1972年にいたる70年間のパンパマルカ教区の婚姻総登録数は 1,017 であり，結婚した男女の出身村別の組み合わせを10年ごとに累積して示したのが表 2－a ～ 2－h である（表 2－a は1903-10年，2－h は70年間の累積）。この表をみると，70年を通じて，教区，プナ地区，ケブラダ地区，村のいずれの範囲をとっても，内・外婚の傾向が顕著に変化したことはないようである。また，アプリマク県を貫通する海岸～高地を結ぶ幹線道路（国道26号線）の開通，都市への人口移動，アシエンダ（大農園）の解体など，この教区を含めたアプリマク県全体の過去70年間の経済的・社会的

表2-a　出身地別内・外婚数（1903-10年）

男＼女		プナ地区				ケブラダ地区				教区外	小計	無記述	判読不可	計
		トトラ	ピスキ	メスティ	イスカ	パンパ	コタル	コルカ	カライ					
プナ地区	トトラ	1								1	2			2
	ピスキコチャ									1	1			1
	メスティサス			5						2	7			7
	イスカワカ										0			0
ケブラダ地区	パンパマルカ				1	20	2			2	25			25
	コタルセ						16				16	1		17
	コルカ						1	3	1		5			5
	カライバンバ								11		11			11
教区外						2	1		4	1	8			8
小計		1	0	5	1	22	20	3	16	7	75			
記述無し				1								1		2
判読不可														0
計		1	0	6	1	22	20	3	16	7		2	0	78

表2-b　出身地別内・外婚数（1903-20年）

男＼女		プナ地区				ケブラダ地区				教区外	小計	無記述	判読不可	計
		トトラ	ピスキ	メスティ	イスカ	パンパ	コタル	コルカ	カライ					
プナ地区	トトラ	6								2	8	3		11
	ピスキコチャ		2							1	3			3
	メスティサス			20						2	22	2		24
	イスカワカ			1	6	3				2	12			12
ケブラダ地区	パンパマルカ			1	3	39	2		2	2	49	3		52
	コタルセ					2	38	1	1	2	44	2		46
	コルカ					2	1	10	1		14			14
	カライバンバ					1		1	48		50	4		54
教区外				2		3	2	1	6	3	17			17
小計		6	2	24	9	50	43	13	58	14	219			
記述無し				1		1						12		14
判読不可													1	1
計		6	2	25	9	51	43	13	58	14		26	1	248

表2-c　出身地別内・外婚数（1903-30年）

男＼女		プナ地区				ケブラダ地区				教区外	小計	無記述	判読不可	計
		トトラ	ピスキ	メスティ	イスカ	パンパ	コタル	コルカ	カライ					
プナ地区	トトラ	6								2	8	3		11
	ピスキコチャ		5							1	6			6
	メスティサス			24						2	26	2		28
	イスカワカ			1	10	3				3	17			17
ケブラダ地区	パンパマルカ			1	3	53	2		2	2	63	4		67
	コタルセ					4	48	1	1	2	56	2		58
	コルカ					2	1	19	1		23			23
	カライパンパ					1		2	70	1	74	6	1	81
教区外				2		4	3	1	6	5	21			21
小計		6	5	28	13	67	54	23	80	18	294			
記述無し				1		1						69	1	72
判読不可													1	1
計		6	5	29	13	68	54	23	80	18		86	3	385

表2-d　出身地別内・外婚数（1903-40年）

男＼女		プナ地区				ケブラダ地区				教区外	小計	無記述	判読不可	計
		トトラ	ピスキ	メスティ	イスカ	パンパ	コタル	コルカ	カライ					
プナ地区	トトラ	6								2	8	3		11
	ピスキコチャ		5							1	6			6
	メスティサス			29	2	1				2	34	2		36
	イスカワカ			1	17	3				3	24			24
ケブラダ地区	パンパマルカ			1	3	79	4	1	2	3	93	5		98
	コタルセ				1	4	65	1	2	3	76	4		80
	コルカ					3	2	28	1		34			34
	カライパンパ					1	1	3	137	5	147	7	1	155
教区外				2		5	4	1	9	11	32			32
小計		6	5	33	23	96	76	34	151	30	454			
記述無し				1		1						85	1	88
判読不可													1	1
計		6	5	34	23	97	76	34	151	30		106	3	565

表2-e　出身地別内・外婚数（1903-50年）

男＼女		プナ地区				ケブラダ地区				教区外	小計	無記述	判読不可	計
		トトラ	ピスキ	メスティ	イスカ	パンパ	コタル	コルカ	カライ					
プナ地区	トトラ	14								2	16	3		19
	ピスキコチャ		6							1	7			7
	メスティサス			37	4	1				2	44	2		46
	イスカワカ			1	18	5			1	3	28			28
ケブラダ地区	パンパマルカ			1	3	116	5	4	4	4	137	6		143
	コタルセ				2	5	115	1	3	3	129	6		135
	コルカ				1	7	2	53	3		66	1		67
	カライバンバ					2	1	4	155	7	169	7	1	177
教区外				2		8	7	1	12	16	46	1	1	48
小計		14	6	41	28	144	130	63	178	38	542			
記述無し				1		2		1				85	1	90
判読不可													1	1
計		14	6	42	28	146	130	64	178	38		111	4	761

表2-f　出身地別内・外婚数（1903-60年）

男＼女		プナ地区				ケブラダ地区				教区外	小計	無記述	判読不可	計
		トトラ	ピスキ	メスティ	イスカ	パンパ	コタル	コルカ	カライ					
プナ地区	トトラ	22								3	25	5		30
	ピスキコチャ		10							1	11	1		12
	メスティサス		1	54	4	1				3	63	4		67
	イスカワカ			2	23	6	1		1	4	37	1		38
ケブラダ地区	パンパマルカ			4	3	134	6	4	4	5	160	13		173
	コタルセ				2	8	124	1	3	4	142	9		151
	コルカ				1	9	3	62	3		78	3		81
	カライバンバ				1	3	2	4	175	9	194	10	1	205
教区外				3		9	9	1	14	31	67	4	1	72
小計		22	11	63	34	170	145	72	200	60	777			
記述無し				1		2		1	1			91	1	97
判読不可										1		1	2	4
計		22	11	64	34	172	145	73	201	61		142	5	930

表2-g 出身地別内・外婚数（1903-70年）

男＼女		プナ地区				ケブラダ地区				教区外	小計	無記述	判読不可	計
		トトラ	ピスキ	メスティ	イスカ	パンパ	コタル	コルカ	カライ					
プナ地区	トトラ	24								3	27	5		32
	ピスキコチャ		15							1	16	1		17
	メスティサス		1	56	5	2				4	68	4		72
	イスカワカ		1	2	23	6	1		1	4	38	1		39
ケブラダ地区	パンパマルカ			5	3	138	6	4	4	6	166	13	1	180
	コタルセ				2	8	131	1	3	7	152	9		161
	コルカ				1	9	3	69	4		86	3		89
	カライバンバ				1	4	3	4	194	13	219	10	1	230
教区外				3		10	10	2	14	34	73	4	1	78
小計		24	17	66	35	177	154	80	220	72	846			
記述無し				1		2	1	1	1			91	1	98
判読不可										1		1	2	4
計		24	17	67	35	179	155	81	221	73		142	6	1000

表2-h 出身地別内・外婚数（1903-72年）

男＼女		プナ地区				ケブラダ地区				教区外	小計	無記述	判読不可	計
		トトラ	ピスキ	メスティ	イスカ	パンパ	コタル	コルカ	カライ					
プナ地区	トトラ	24								3	27	5		32
	ピスキコチャ		15							1	16	1		17
	メスティサス		1	56	5	2				4	68	4		72
	イスカワカ		1	2	23	6	1		1	4	38	1		39
ケブラダ地区	パンパマルカ			5	3	145	6	4	4	6	173	13	1	187
	コタルセ				2	8	132	1	3	7	153	9		162
	コルカ				1	9	3	69	4		86	3		89
	カライバンバ				1	4	3	4	201	13	226	10	1	237
教区外				3		10	11	2	15	34	75	4	1	80
小計		24	17	66	35	184	156	80	228	72	862			
記述無し				1		2	1	1	1			91	1	98
判読不可										1		1	2	4
計		24	17	67	35	186	157	81	229	73		142	6	1017

変化を考慮した場合，これらの外的要因はほとんど教区住民の内・外婚傾向に影響を及ぼしていないともいえる。つまり，教区の内・外婚傾向は過去70年間にわたり非常に安定したものである。そこで，以下には70年間の全体だけを取りあげることにするが(表2-h)，その際，総数1,017のうちから，出身地について記述のないもの及び判読できなかったもの（155）と，男女ともに教区外の出身者であるもの（34）は当面の検討から除外することにし，828を総数として扱う。

まずなによりも注目されるのは，村内婚の比率が非常に高いことで，プナ地区の村，ケブラダ地区の村，いずれにも共通した現象である。たとえばメスティサスでは，男性（すべて牧民とみなしてよい）の場合は56/68＝82%，女性でみれば56/66＝85%が同村出身者と結婚している。ケブラダ地区のカライバンバの村内婚率は，男性で201/226＝89%，女性で201/228＝88%となっている。メスティサスの男性の場合，結婚相手をプナ地区出身の女性に広げると62/68＝91%，パンパマルカ教区まで広げると64/68＝94%となり，教区外の女性との結婚は4/68＝6%でしかない（女性でみればそれぞれ58/66＝88%，63/66＝95%，3/66＝5%）。一方，カライバンバの男性についてみると，ケブラダ地区内の女性との結婚は212/226＝94%(女性でみると212/228＝93%)であり，教区外の女性との結婚は13/226＝6%（女性では15/228＝7%）でしかない。このように比較的狭い範囲に限った地域内婚の比率が高いことは，他地域についてこれまで2, 3報告されている事実とも一致している [友枝　1968: 11; Bolton　1977: 227; Hickman and Stuart　1977: 57; Brush　1977: 139]。

そこで，パンパマルカ教区において，プナ地区内婚，ケブラダ地区内婚の比率が非常に高いことを考慮して，総数828の婚姻の男女の出身地をプナ地区，ケブラダ地区，教区外にまとめて示したのが表3-a～3-gと表4である。表3-a～3-gは10年ごとに集計した結果であり(3-aは1903～10年，3-gは1961～72年)，表4は70年間の累積を示している。これをみても70年間における外・内婚の比率に顕著な変化はないことが確かめられる。表4によれば，70年間にプナ地区内の男性が同地区内の女性と結婚している率は127/149＝85%(女性でみれば127/142＝89%)，教区内の女性との結婚は137/149＝92%(女性では139/142＝98%)，教区外の女性との婚姻は12/149＝8%（女性では3/142＝2%）である。また，ケブラダ地区内男性の同地区内婚は600/638＝94%(女性では600/648＝93%)，教区内612/638＝96%(女性では610/648＝94%)，教区外26/638＝4%（女性では38/648＝6%）である。

牧民と農民の婚姻の可能性を検討しようとする場合，まずプナ地区内婚の127は牧民同士の結婚であるから，検討の対象から除外することができる。しかし，その他の

表3a　プナ/ケブラダ別内・外婚数(1903-10)

男＼女	プナ	ケブラダ	教区外	計
プナ	6	0	4	10
ケブラダ	1	54	2	57
教区外	0	7		7
計	7	61	6	74

表3b　プナ/ケブラダ別内・外婚数(1911-20)

男＼女	プナ	ケブラダ	教区外	計
プナ	29	3	3	35
ケブラダ	3	95	2	100
教区外	2	5		7
計	34	103	5	142

表3c　プナ/ケブラダ別内・外婚数(1921-30)

男＼女	プナ	ケブラダ	教区外	計
プナ	11	0	1	12
ケブラダ	0	58	1	59
教区外	0	2		2
計	11	60	2	73

表3d　プナ/ケブラダ別内・外婚数(1931-40)

男＼女	プナ	ケブラダ	教区外	計
プナ	14	1	0	15
ケブラダ	1	127	6	134
教区外	0	5		5
計	15	133	6	154

表3e　プナ/ケブラダ別内・外婚数(1941-50)

男＼女	プナ	ケブラダ	教区外	計
プナ	20	3	0	23
ケブラダ	2	146	3	151
教区外	0	9		9
計	22	158	3	183

表3f　プナ/ケブラダ別内・外婚数(1951-60)

男＼女	プナ	ケブラダ	教区外	計
プナ	36	2	3	41
ケブラダ	4	65	4	73
教区外	1	5		6
計	41	72	7	120

表3g　プナ/ケブラダ別内・外婚数(1961-72)

男＼女	プナ	ケブラダ	教区外	計
プナ	11	1	1	13
ケブラダ	1	55	8	64
教区外	0	5		5
計	12	61	9	82

表4　プナ/ケブラダ別内・外婚数(1903-72)

男＼女	プナ	ケブラダ	教区外	計
プナ	127	10	12	149
ケブラダ	12	600	26	638
教区外	3	38		41
計	142	648	38	828

場合については，個々に検討してみなければならない。たとえば，ケブラダ地区の4つの村には，農民だけでなく，領域内のプナ帯に牧民が少数ではあっても住んでいる(p. 16 参照)。したがって，ケブラダ地区とプナ地区のあいだに生じた結婚（プナの牧民男性とケブラダの女性10例，ケブラダの男性とプナの牧民女性12例）は，ただちに農民と牧民間の結婚とはいえない。同様の理由で，ケブラダ地区内婚600のすべてが農民同士の結婚とはいえないし，教区外との結婚例の中に，農・牧民間の結婚がある可能性は残されている。これらのケースを原表に戻って調べると，次のことがまず指摘できる。

1. プナ地区の牧民男性が教区外の女性と結婚した数は12である。このうち9例は，記載されている女性の出身地から判断して，牧民女性とみなすことができる。他の2例は，記載された地名の示す範囲が広すぎるために，牧民とも農民とも判定することができない。残る1例は女性の出身地がチャクニャとある。チャクニャはチャルワンカ川下流にあり，プナが非常に狭く(地図1)，牧民もほとんど住んでいないので，この女性が農民である可能性は高い。また，この村は教区の牧民が交易の旅をするときのルートにも入っているから，交易関係を通じて農民と牧民間の結婚が成立したことも想定できる。
2. プナ地区の牧民女性と結婚した教区外の男性は3人だけであり，そのうちの2人はチャルワンカ出身である。チャルワンカは，全体としては教区よりも低い位置にあり(地図1参照)，プナの面積やそこに住む牧民の数も限られているから，この2人が農民である可能性はある。ただし，2例とも居住地はメスティサスになっており（本稿での検討においては，出生地と居住地が記されている場合には，前者を出身地として採用した)，しかも，その中の1人には「牧民」と職業についての記載（後述）がある。つまり2人とも事実上は牧民である。残りの1例は，教区のプナと領域を接しているアンダワイラス郡パンパチリ（Pampachili）の出身である。この村は，教区のケブラダ地区と同様，谷に農民が居住し，プナに牧民が住んでいるから，出身地名だけからは農・牧民の区別はつけがたい。

上記2点を考慮すると，教区内のプナ地区の出身者が教区外の人と結婚した15例について，その多くは牧民同士であり(11例)，反対に，農・牧民間婚の可能性が高いのは，メスティサスの男性牧民と結婚しているチャクニャの女性の1例だけである。

3. ケブラダ地区の男性（女性）が教区外の女性（男性）と結婚した数は26（38）である。ケブラダ地区のカライバンバについてだけいえば，この数は13（15）である。教区外の女性13人の出身地のうち，6つは下流の村，つまり牧民がいない

か，またはほとんどいない村であり，農民と牧民の婚姻は想定しがたい。残り7つの出身地はカライバンバに隣接する教区外の村々で，いずれもカライバンバと似たような条件下の村であり，村領域のプナには少数ながら牧民が居住している。したがって，この7例については，農民同士とも農・牧民間とも判定することはできない。

4. カライバンバに教区外の男子が入婚した15例については，6例は下流の村の出身者で，牧民である可能性はない。またイカ，ワンカベリカ (Huancavelica)，クラワシなど遠隔地の出身者4人についても，牧民ではないと判定できる。残り5人は近隣村の出身であるから，上述の理由で，農・牧民婚の可能性も否定はできない。カライバンバだけでなく，ケブラダ地区の人々の教区外婚は全体として同じ傾向を示し，農・牧民婚は，わずかではあるにしても可能性としては残っている。全体数64のうち25例については，判定できないという理由で農・牧民婚の可能性を残す。

ところで，上に検討した教区外婚に関しては，プナ地区とケブラダ地区で顕著な差異をみせている。すなわちケブラダ地区については，教区外からの男性入婚者が38，女性入婚者が26で，その差はさして大きくはないにしても男性数の方が上まわっている。一方，プナ地区すなわち牧民については，教区外からの男性入婚者が3に対して，女性入婚者は12で，前者は極端に少ない。この現象については次のような解釈ができる。

1. ケブラダ地区の住民は事実上はほとんどが農民であり，教区外であっても近隣村との社会・自然環境は共通しているので，農民の男女いずれの入婚者にしても，結婚を契機にした移住によって，大きな環境変化への適応を迫られるような事態にはならない。
2. ケブラダ地区への教区外からの入婚者（特に男性）には，非農業者が含まれている。教区外からの男性38人のうち，少なくとも6人は商人あるいは給与生活者であることが記載されているし（表5－c），また，遠隔地からの入婚男性は非農業者である可能性が高い。
3. プナ地区へ教区外から入婚した女性の12人については，先に述べたように，3人は非牧民である可能性はあるものの，残りの9人は近隣牧民村の出身者であり，これについても入婚女性が適応をせまられるような事態は考えられない。
4. 前章で明らかにしたように，牧民男性は交易のために広い範囲を移動する旅をしており，教区のプナ地区は，アヤクチョ，アレキパ地方の一部牧民の旅のルー

トにも含まれている。それにもかかわらず，男性の入婚は前述の3例以外にはない。比較的遠隔地からの牧民男性入婚の可能性は，パンパチリの男性1人だけである。つまり交易のための移動は，牧民男性にとって結婚・移住の契機にはほとんどなっていないといえる（パンパチリの牧民の交易圏は，教区牧民のそれとほぼ重なっている)。

5. 交易はむしろ，牧民男性の一定地域外への移住をはばんでいる要因と考えられる。交易は恒常的な物資の交換関係を確立した人々のあいだに行われるのが一般であり(前章の牧民の話のなかでも，親子2代にわたっての旅が言及されている)，自分の交易圏外へ移住した牧民男性は，その移住地先を含む別の交易圏において，新たに交易を目的とした人間関係をつくらねばならぬかもしれない。

6. 教区内でみると，プナ地区男性のケブラダ地区女性との結婚は10例であり，ケブラダ地区男性のプナ地区女性（牧民）との結婚はそれを上まわる12例である。この12例中の多くは，ケブラダ地区に住む牧民男性と想定できるのであるから，同一交易圏内では牧民男性の結婚を契機にした移住も充分に考えられる。

パンパマルカ教区を含めたアイマラエス郡では，この地の牧民とチャルワンカ川下流からアンダワイラス地方へかけてのケチュア帯下部の農村とのあいだに交易が頻繁である。これに対して，隣接するアンタバンバ郡の牧民は，アンタバンバ川下流からアバンカイ地方の農村とのあいだに，主たる交易関係を確立している。このような一定範囲の交易圏の成立が，牧民男子の他圏への移住をはばんでいるかもしれない。

教区外婚からみた限りでは，牧民の場合は夫方居住がはるかに多いことになり，これはわれわれのプナ地区のメスティサスにおける観察事実とも一致している。これに対して，ケブラダ地区では夫方居住と妻方居住に関して，教区外婚に関する限り後者の方がまさっている。これも，谷に位置するカライバンバにおいては，村内でも妻方居住が，夫方居住にまさることはないにしても，かなりあるというわれわれの観察と一致する。

これまでの検討で，教区外との結婚については，牧民と農民間の結婚が可能性として非常に少ないことが，数まではっきりさせることはできないにしても，明らかになったと思う。次の問題は，教区内におけるプナ地区とケブラダ地区間およびケブラダ地区内での農・牧民婚の可能性である。この点については，すでに検討した過程でも明らかなように，これまで用いてきた資料だけでは，結婚総数のうちどれだけが農・牧民婚であるかを判定することはできない。しかし，70年間の婚姻登録の一部には，結婚した男性の職業が記載されているので，これを利用してもう少し検討を続けるこ

表5-a 農民の出身地別内・外婚数

男＼女		プナ地区				ケブラダ地区				教区外	小計	記述無し	判読不可	計
		トトラ	ピスキ	メステ	イスカ	パンパ	コタル	コルカ	カライ					
プナ地区	トトラ										0	2		2
	ピスキコチャ										0			0
	メスティサス										0			0
	イスカワカ										0			0
ケブラダ地区	パンパマルカ					37				1	38	6		44
	コタルセ					3	31			2	36	3		39
	コルカ					2	1	26			29	1		30
	カライバンバ					1	2		64	2	69	2		71
教区外							2		1	2	5			5
小計						43	36	26	65	7	177	14		191
記述無し									1			2		3
判読不可														0
計		0	0	0	0	43	36	26	66	7	177	16	0	194

表5-b 牧民の出身地別内・外婚数

男＼女		プナ地区				ケブラダ地区				教区外	小計	記述無し	判読不可	計
		トトラ	ピスキ	メステ	イスカ	パンパ	コタル	コルカ	カライ					
プナ地区	トトラ	7								1	8			8
	ピスキコチャ		1							1	2			2
	メスティサス		1	19		1					21	1		22
	イスカワカ			1	10	3	1			1	16			16
ケブラダ地区	パンパマルカ				1	12		1	1		15		1	16
	コタルセ				1		1				2			2
	コルカ							3			3			3
	カライバンバ							1	4	2	7		1	8
教区外				1		1			1		3		1	4
小計		7	2	21	12	17	2	5	6	5	77	1	3	81
記述無し													2	2
判読不可														0
計		7	2	21	12	17	2	5	6	5	77	1	5	83

表5-c　商人その他の出身地別内・外婚数

男＼女		プナ地区				ケブラダ地区				教区外	小計	無記述	判読不可	計
		トトラ	ピスキ	メステ	イスカ	パンパ	コタル	コルカ	カライ					
プナ地区	トトラ										0			0
	ピスキコチャ										0			0
	メスティサス										0			0
	イスカワカ					1					1			1
ケブラダ地区	パンパマルカ			1	1		2		1	1	6			6
	コタルセ						2			1	3			3
	コルカ										0	1		1
	カライバンバ								15	3	18	1		19
教区外						1	3		2	1	7			7
小計				1	1	2	7		18	6	35	2		37
記述無し								1			1	1		2
判読不可														0
計		0	0	1	1	2	7	1	18	6	36	3	0	39

とができる。

農民と牧民の結婚

職業が明記されている例は，時期的には1914年後半から19年前半，1925年後半，1931年から38年にかけて，1948年から59年にかけてと断続的である。また，上記期間中であっても無記入の例も多いので，男性職種が区別できる婚姻件数は，検討してきた総件数828に対しては312件にすぎない。農民と牧民について，出身村別の結婚数を示したのが表5-a，bである（表5-cには，商人その他のものをまとめた）。

まず，結婚した男性が農民である場合（表5-a），その相手女性は同村内，ケブラダ地区内であるのがほとんどで，婚姻件数177のうち同村内は158（158/177＝89%），ケブラダ地区内は167（167/177＝94%）となる。この結婚は，ケブラダ地区内にも牧民が居住しているので，必ずしも農民同士の結婚を意味しないが，農民が居住していないプナ地区の村出身の女性との間には，結婚が1例も生じていないことは少なくとも明らかである。教区外からの入婚女性5人は，いずれも谷の村出身であるから，この中に牧民の女性が含まれている可能性はほとんどない。

次に，男性の職種が牧民と記載された例をみると（表5-b），まず，対象とする婚

姻総数は77あり，同じプナ地区内婚（同村内婚も含めて）の39例については，相手の女性がプナの牧民であると断定してよい。また，ケブラダ地区の牧民がプナ地区の女性と結婚した2例（いずれも女性はイスカワカ出身）と，教区外の牧民がプナ地区の女性（メスティサス出身）と結婚した1例についても，牧民同士と断定してよい。つまり77例のうち42例は牧民同士の結婚であるから，検討を要するのは残り35例についてということになる。

1. プナ地区の牧民とケブラダ地区の女性との結婚。この5例（パンパマルカ4，コタルセ1）については，これまでと同様女性が牧民であるか農民であるかは判定できない。ただし，パンパマルカは先述のように他のケブラダの村に比べると領域内のプナが広く，牧民がかなり居住している。プナが隣接しているメスティサス，イスカワカの牧民が，この牧民女性と結婚している可能性が大いにある。コタルセにもプナはあり，牧民が住んでいるのは事実であるが，数の上ではケブラダ4村のうちではもっとも少ない。したがって，この女性が農民である可能性は残る。
2. プナ地区の牧民と教区外の女性との結婚。3例あるが，そのうち2例は女性の出身地から判断して，牧民である可能性が高い。しかし，残りの1例は記載された地名からは範囲が広すぎて判定できない。
3. ケブラダ地区の牧民男性と同地区の女性との結婚。23例もあることから，まずケブラダ地区には，パンパマルカだけでなく，それぞれ4村の領域内のプナに牧民が居住していることが明らかになる。パンパマルカ15人，カライバンバ7人，コルカ3人，コタルセ2人という数は，そのままこれらの村が領有するプナの広さと，そこに住む牧民の数を反映しているようである(地図1参照)。しかし，この23例のいずれも，農・牧民間か牧民同士の結婚かを判定する材料を欠いている。
4. ケブラダ地区の牧民男性と教区外の女性との結婚。2例ある。女性はパンパチリとパリナコチャス（Parinacochas: アヤクチョ県）の出身であり，牧民，農民いずれの可能性も残る。
5. 教区外の牧民男性とケブラダ地区の女性との結婚。これも2例で，いずれも女性が牧民か農民かを判定する材料を欠いている。

結局，牧民男性であることが記載上明らかであっても，相手女性が農民か牧民かの区別が判明しない以上は，上記いずれのケースも農・牧民間の結婚の可能性は少ないということの傍証としかならない。

1955年から1958年の4年間に関しては，部分的にではあるが，男性のみでなく女性

の職種が記載されている。しかし，総数わずか62にすぎず，また大半は「家事」と記載されているため，牧民か農民かの区別をつける役には立たない。女性について判別できるのは農業9例，牧畜13例だけであるが，前者の場合，相手男性の職種は7人が農業であり，1人は給与生活者（カライバンバ居住者で，学校の教師などが想定できる）であり，他の1人は記入もれもしくは農業と判定できる。つまり女性を農民と記載した例に関する限り，相手男性が牧民であるケースはない。一方，女性の職種を牧畜と記載した13例については，12例は相手男性が牧民であり，1例のみが商人（コルカ出身）である。結局，牧民・農民間の結婚はこの22例の中には1例もないわけであるが，コルカ出身の商人との結婚は，それに近いと考えることもできる。

以上のような検討を通じていえるのは，当面の対象地域であるパンパマルカ教区での過去70年間の婚姻登録の中で，農民と牧民の結婚例は，具体的な数字で示すことはできないが，その可能性がきわめて少ないことである。というよりむしろ，ほとんど生じないといってよいであろう。もう1度表4に戻って考えれば，教区内の農・牧民婚は，1)プナ地区男性がケブラダ地区の女性と結婚した10例，2)ケブラダ地区男性がプナ地区女性と結婚した12例，及び，3)ケブラダ地区内婚の中の一部に生じた可能性があるだけになる。しかし，3)の場合は居住者のほとんどは農民であり，牧民の数自体が限られているので，可能性としては考慮されるが，実際の数はきわめて少ないとしてよい。

職業を記載した例だけでみると，教区内の牧民男性はプナ地区で47人，ケブラダ地区では27人である（表5-b）。仮にこの比率で教区内の2地区に牧民男性が分かれているとしたら，全体としては，プナ地区の149人に対し，ケブラダ地区は149×27/47＝約86人ということになる（カライバンバ，パンパマルカについては，われわれの印象にほぼ一致している。というのは，われわれはケブラダ地区の牧民人口をケブラダ全体の1/10ぐらいと推定しているからである)。この86人が，プナ地区の牧民男性と同じような牧民内婚率（136/149＝91%）を示すとすれば（牧民男性149の結婚のうち，少なくともプナ地区女性127人と，先述した教区外女性のうちの9人との結婚（p. 34参照)は，確実に牧民同士のものである)，86×0.91＝78人は牧民女性との結婚であり，残り8人のうちにだけ農民女性と結婚した可能性が残されている。この数はもちろん推定でしかないが，ケブラダ地区出身男性の教区内の結婚総数612に対して，きわめて低い値となる。

一方，これまでの分析からは，はっきりと牧民と農民間の結婚であると断定できるものは，教区内・外婚を通じてなかったことになる。しかし，その可能性の高いもの

としては，教区外のチャクニャの女性との結婚例，教区内のコルカの商人男性との結婚例の2つだけをあげることができる。

牧民と農民の通婚がほとんどないという以上の結果は，ボリビア領のライミの場合と対照的である。ライミは「ほとんど完全に」内婚であるという点では，パンパマルカ教区と同じである（Harris がライミをエスニック・グループとしてとらえる根拠の1つである）。さらに，ライミの場合は生業形態の違う高地部（ヒツジ・リャマ飼育と根茎栽培）と低地部（トウモロコシ栽培）の住民間に通婚が多い。しかし，パンパマルカの場合，一定地域（教区）内婚は牧民内婚と農民内婚の2つに遊離し，婚姻・親族に関する限りそれぞれに閉じた社会を形成している。このような農民と牧民の通婚におけるライミとパンパマルカでの違いを説明するのは，本稿の範囲を越えるが，一定地域の高度差利用の形態に相違があるのは，注目すべきことのように思われる。

文　　献

BOLTON, Ralph

1977 The Qolla Marriage Process. In Ralph Bolton and Enrique Mayer (eds.), *Andean Kinship and Marriage,* A Special Publication of the American Anthropological Association No. 7, pp. 217–239.

BRUSH, Stephen

1977 Kinship and Land Use. In Ralph Bolton and Enrique Mayer (eds.), *Andean Kinship and Marriage,* A Special Publication of the American Anthropological Association No. 7, pp. 136–152.

CASAVERDE R., Juvenal

1977 El trueque en la economía pastoril. In Jorge Flores Ochoa (ed.), *Pastores de puna,* Instituto de Estudios Peruanos, pp. 171–191.

CONCHA CONTRERAS, Juan de Dios

1975 Relación entre pastores y agricultores. *Allupanchis* 8: 67–101.

CUSTRED, Glynn

1974 Llameros y comercio interregional. In Giorgio Alberti y Enrique Mayer (eds.), *Reciprocidad e intercambio en los Andes Centrales,* Instituto de Estudio Peruanos, pp. 252–289.

FLORES OCHOA, Jorge

1968 *Los pastores de Paratía—una introducción a su estudio—.* México: Instituto Indigenista Interamericano.

FUJII, Tatsuhiko y Hiroyasu TOMOEDA

1981 Chacra, Laime y Auquénidos—Explotación Ambiental de una Comunidad Andina. In Shozo Masuda (ed.), *Estudios Etnográficos del Perú Meridional,* Universidad de Tokio, pp. 33–63.

HARRIS, Olivia

1978 El parentesco y la economía vertical en el Ayllu Laymi (Norte de Potosí). *Avances* 1: 51–64.

HICKMAN, John and William STUART

1977 Descent, alliance, and moiety in Chucuito, Peru: An Explanatory Sketch of Aymara

Social Organization. In Ralph Bolton and Enrique Mayer (eds.), *Andean Kinship and Marriage*, A Special Publication of the American Anthropological Association No. 7, pp. 43–59.

INAMURA, Tetsuya

1982 Adaptación Ambiental de los Pastores Altoandinos en el Sur del Perú—Simbiosis Económico-social con los Agricultores. In Shozo Masuda (ed.), *Estudios Etnográficos del Perú Meridional*, Universidad de Tokio, pp. 65–83.

MAR DE LA TORRE, Humberto

1979 *La historia de Aymaraes y sus problemas.* Chalhuanca.

MAYER, Enrique

1971 Un carnero por un saco de maíz, aspectos del trueque en la zona de Chaupiwaranga: Pasco. *Actas y Memorias del XXXIX Congreso Internacional de Americanistas*, Lima 1970, 3: 184–196.

MURRA, John

1972 El "Control Vertical" de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas. In Iñigo Ortiz de Zúñiga, *Visita de la Provincia de León de Huánuco en 1562*, Tomo II, Huánuco: Universidad Nacional Hermilio Valdizán, pp. 429–468.

ONEC (Oficina Nacional de Estadística y Censos)

1974 *Censos Nacionales, VII de Población, II de Vivienda, 4 de Junio de 1972.* Lima: Oficina Nacional de Estadística y Censos.

PULGAR VIDAL, Javier

n.d. *Geografía del Perú: Las ocho regiones del Perú.* Lima: Editorial Universo S.A.

SOUKUP, J.

1970 *Vocabulario de los nombres vulgares de la flora Peruana.* Lima: Colegio Salesiano.

友枝啓泰

1968 「中央ペルーのインディオ農村における結婚——アヤクチョ県の事例——」『民族学研究』33(1): 1–16.

TOMOEDA, Hiroyasu and Tatsuhiko FUJII

1985 Marriage Relations Between *Punaruna* and *Llaqtaruna*—The Case of Pampamarca Parish, Apurimac, Peru—. In Shozo Masuda, Izumi Shimada and Craig Morris (eds.), *Andean Civilization and Ecology—An Interdisciplinary Perspective on Andean Ecological Complementarity—*, University of Tokyo Press, pp. 301–309.